

ヴォワチュールの神話世界と女性美

田 島 俊 郎

Le monde mythologique et les beautés féminines chez Voiture

Toshiro TAJIMA

Résumé

Dans les six sonnets écrits par Vincent Voiture, nous voyons toujours les mêmes thèmes: la mythologie grecque et romaine, les apologies de beautés de femme. Et nous savons aussi que nous rencontrons ces thèmes non seulement dans ses sonnets mais aussi dans toute son œuvre en vers et en prose. Il a chanté les beautés féminines en se servant des personnages et des images de la mythologie grecque et romaine.

Néanmoins, nous nous apercevons souvent que les femmes chantées par le poète n'ont que des images abstraites. Cet auteur du *Sonnet à Uranie* ne s'intéressait qu'aux yeux des femmes. Il ne mentionne presque pas d'autres parties du visage et du corps. Il introduit des personnages du monde mythologique dans ces œuvres. Et ce recours au monde imaginaire renforce notre impression; dans les poèmes de Voiture, les images concrètes manquent.

Nous constatons cette tendance, quand nous consultons la base de données informatique. Nous informons aussi de la création de cette base.

はじめに

ヴォワチュール (Vincent Voiture) の詩、書簡ではギリシア、ローマの神話的世界への言及、女性の美しさの賛美などがたびたび繰り返される。もちろんこれらは文芸という制度自体の、あるいは17世紀前半という時代の文化的背景が作品世界へ投影されたものだと考えられよう。つまり「月並み」なのだ。「月並み」とは制度化され、固定化してしまった文芸の題材である。したがってヴォワチュールのみに見られる特異なものではないだろう。詩人が凡庸であれば

あるほど月並みな表現への依存の度合いは大きくなる。ただ「月並み」の中でも、作家が「月」を語るか「花」を語るかは作家の好みの反映である。本論の目的は、「月並み」の中にヴォワチュールが偏愛するテーマを探ることである。

そのための道具として、コンピュータ上の自作のデータベースを使う。コンピュータの利用は、すでに多くの研究者にとって日常になっており、ことさら筆者の道具立てを開陳するほどのことはないのかもしれない。しかし線的な読解ではなく、作品全体を面的に、執筆年代もジャンルも配列も無視して読み取ろうというのだから、その読みの手順については紹介しておいた方がよいかもしれないと考え、最初にデータベースの構築について語る。

ヴォワチュールの全詩作品を研究の対象とするが、sonnet6編をひとまずの手がかりにする。全作品の語彙やテーマを統計的に並べてみても、それはそれとして報告しなければならない事柄かもしれないが、膨大な図や表の羅列による退屈な報告にしかならないような気がする¹⁾。sonnetの中で興味を引くテーマを全作品についても見ていくことにする。

sonnet を特権的に見ていく第一の理由は、sonnet というジャンルの人気の高さ、ジャンルとしての高貴さからも、詩人の彫琢が偲ばれると考えられるからである。さらに rondeau のような「機会の詩」では、状況によって偏った語彙、テーマを多用するに違いないと考えるからである。そして最大の理由は、詩人としてのヴォワチュールの名を文学史の中に存続せしめている作品 *La Belle Matineuse* と *Sonnet à Uranie* がこの形式で書かれているからである。

データベースの構築、概要

テキスト

ヴォワチュールの詩のデータベースをコンピュータ上に作成した。

使用機器は Apple 社製 Macintosh[®] IIsi。

使用テキストは VOITURE, Vincent, *Poésies*, édition critique publiée par Henri Lafay, 2vols., Paris, Librairie Marcel Didier, 1971.

他に VOITURE, Vincent, *Œuvres de Voiture*, lettres et poésies, nouvelle édition revue en partie sur le manuscrit de Conrart, corrigée et augmentée de lettres et

1) こういった統計処理のまやかしの客観性については充分意識的であらねばならない。あくまでデータベース上で検索しているのはヴォワチュールの作品の中だけの単語である。それらがヴォワチュールの詩的世界の特殊性の現れであるか、あるいは時代の、フランスの、西ヨーロッパ文化圏の特殊性の現れであるかは、ヴォワチュール以外の作品を含まないこのデータベースでは確定できない。

pièces inédites, avec le Commentaire de Tallemant des Réaux, des éclaircissements et des notes par M. A. Ubicini, 2vols., Genève (Paris), Slatkine, 1967 (1855). からヴァリエントを採った。

テキストの光学読みとりと整理

まず印刷面が比較的明瞭な Lafay 版をスキャナーで読み込む。使用機器は Apple Scanner、ソフトウェアは附属のもの。全文を一度画像データとして読み込んだ後、光学読みとりソフトウェア Omnipage® professional Macintosh® Version 2.1 でテキストファイル化する。この段階では、ことに綴字記号を含む部分に認識間違いが多く見られた。したがってこのままではデータベース化はできない。

そこでさらにこのテキストファイルを MS-Word english version 4.0 にフランス語辞書のみ組み込んだもので読み込む。次の作業はスペルチェッカによる orthographe の確認である。文字の認識が明瞭にできていないものがあるので、この段階の作業は半ば手作業であった。さらに Lafay 版の綴りが17世紀当時のものを使用しているので、現代語の辞書しか持たないスペルチェッカでは、17世紀のものとしては正しい綴りでも誤りとして認識される。était が時に étoit または estoit と綴られる。この場合は現代の綴りに変換した。ただし、作品全体が古語で書かれている場合や、韻律の必要上半過去の語尾に -oit などの綴りが必要な場合は、古い綴りを残した。実際の古い綴りによる脚韻の例は op.16, v.57.⁽²⁾、op.48, v.1、op.69, v.8、op.106, v.10 など。op.48 の場合は François の綴りについても同様な制約上古い綴りを残した。ただし op.106 は古語で書かれているので、韻律の必要がなくてもデータベース上に古い綴りを採用した。他に目に付く例としては jusque を jusques と綴る場合など。この語では後に母音が続くと音節数に影響が出るので、その場合は原テキストによる綴りを採用した。また licence poétique の場合も誤りと認識される。encore を encor と綴る例などが見られるが、韻律を尊重してしかるべき音節数になるようにした。

さらに同じテキストを、フランス語スペルチェッカ専用ソフトウェア Sans-Faute でもチェックした。基本的な作業は MS-Word 上で行ったものと同様で

2) 作品16の57行目。作品番号および行番号は Lafay 版による。これより先、op. 18, v.1 とあれば、Lafay 版に従って作品18の1行目、つまり Il faut finir mes jours en l'amour d'Uranie の詩句を指すことになる。

ある³⁾。

こうしてできるだけ間違いの少ない形に整理したテキストの一行毎に Lafay 版に基づく作品番号と、行数をつけ加えていく。

これらを手がかりに作品番号と行番号で全作品が一元的に検索できるようになるはずである。この作業は MS-Word に読み込んだテキストに一行毎の番号付けを行う。これは検索、置換、番号付けといった機能でほとんど自動化できる。なおテキストと作品番号、作品番号と行番号の間はタブで区切り、行番号の後にリターン記号を入れて行を区切る。これらはデータベースソフトウェアに読み込む際の作業を自動化するためである。こうして作成されたテキストはソフトウェア独自のフォーマットではなく、テキストファイルとして保存する⁴⁾。

データベース化

テキストファイルとして保存されたデータをカード型データベースソフトウェア FileMaker Pro でデータベース化する。一枚のカード(レコード)に一行の詩句と作品番号、行番号、その他の備考欄など(それぞれがフィールドと呼ばれる)を備えた図書カードのようなものをコンピュータ上で作成する。最初にフィールドを定義しておく。さしあたって、テキスト、作品番号、行番号、備考欄をフィールドとして作成する。FileMaker Pro から、先ほど作成したテキストをデータとして読み込み、カード(レコード)上に並べていく。タブが

-
- 3) 他にフランス語の文法解析ソフトウェアとして Hugo Plus があるが、このソフトウェアは散文の分析を目的としており、シンタックス構造が異なる韻文の分析には適さないのでチェックを行ってはいない。
 - 4) ただし Apple 版のコードに従って記述していることになる。フランス語をいわゆる MS-DOS もしくは Windows 機ではなく、Apple 社のコンピュータで取り扱う最大のメリットは、Apple 社のコンピュータで取り扱われたテキストは、Apple 社が一元的に定義したコードによって記述されているという点にある。MS-DOS 系の機種やいわゆる日本語ワープロ専用機では綴字記号などが一元的に定義できていないので、メーカー毎や、使用アプリケーション毎に、* や[などの制御マークを使って綴字記号付きの文字を定義しているか、外字として定義している。これらの仕様はメーカーによって多様なために実質的に綴字記号は統一的に使用できない。せめて日本で製造され、使用されるワープロソフトウェアおよび専用機に使われる綴字記号のコード配置については、日本フランス語フランス文学会で、JIS コードを補完するものとして統一的なコードの仕様を提案してはどうだろうか。JIS コードにはロシア文字さえ入っているのだから。

各欄（フィールド）の境目になり、リターンがカード（レコード）の切れ目になる。この読み込みは自動的に行われる。

さてこうしてデータベース化されたテキストの検索方法は現実のカードによるものよりはるかに強力で、全体で5500枚（行）を超えるカード（レコード）上の単語を高速で検索できる。ただし語頭検索のみなので、脚韻の頻度を調べることなどはできない。また行毎の検索も可能である。たとえば incipit を集めるために各作品の1行目のみを抽出し、それらをアルファベ順に並べることができる。あるいは備考欄などに書き込んだメモの中の単語を検索できる。

こうして5514行をデータとして格納した⁵⁾。

分析

それでは6編の sonnet を手がかりにヴォワチュールのお気に入りのテーマを眺めてみよう。

sonnet

最初に6編の sonnet をフランス語原文と拙訳をともに示す。

op.17

Sous un habit de fleurs, la Nymphé que j'adore,	1
L'autre soir apparut si brillante en ces lieux,	2
Qu'à l'éclat de son teint et celui de ses yeux,	3
Tout le monde la pris pour la naissante Aurore.	4
La Terre, en la voyant, fit mille fleurs éclore,	5
L'air fut par tout remplis de chants mélodieux,	6
Et les feux de la nuit pâlirent dans les Cieux,	7

5) なおヴァリエントは行全体が全く違うものについては別行と考え、語彙の違い程度の小さなものはかっこの中に入れて同じ行の中に入れた。Lafay 版に示されているヴァリエントは明らかに解釈に差異が出そうなものは採用した。手元に利用可能な Ubicini 版とのヴァリエントもチェックしたが、Ubicini 版は印刷状態がスキャナーでの作業には適さないので手で打ち込む。ただし量的には大したものではない。ヴァリエントを含むためこの5514行は Lafay 版に収められた116点の韻文作品の行数総計より多い。

Et crurent que le jour recommençait encore.	8
Le Soleil qui tombait dans le sein de Thétis,	9
Rallumant tout à coup ses rayons amortis,	10
Fit tourner ses chevaux pour aller après elle.	11
Et l'Empire des flots ne l'eût su retenir;	12
Mais la regardant mieux, et la voyant si belle,	13
Il se cacha sous l'onde et n'osa revenir.	14

〔解説〕 *Belle matineuse* の系列に属する。むしろ夕暮れの美女を歌うのだから *Belle Crépuscule* というべきか。この作品はポーレ嬢 (Angélique Paulet) に捧げられたと思われる。

〔訳〕 花の服を着て、私の崇拜するニンフは、これほどまで輝かしく、過日この場に現われた。その肌の輝きと目の輝きに、皆、それが生まれたばかりのオーロールかと思うほど。(1-4)

彼女の姿に、大地は千の花を開かせ、大気はあまねく調べに満ちた歌にあふれ、夜のかがり火 (星) は空に青ざめ、もう一度昼が来たかと思ったほど。(5-8)

テティス (海の女神) の懷に落ちた太陽は、とっさにその弱まった光線を輝かせ、彼女に従おうと馬首を巡らす。(9-11)

波の帝国も彼を引き止めえない。しかし彼女をさらに見、それがこんなに美しいのに気付き、太陽は海原に隠れて再び姿を現さない。(12-14)

op.18

Il faut finir mes jours en l'amour d'Uranie,	1
L'absence ni le temps n'en sauraient guérir,	2
Et je ne vois plus rien qui me pût secourir,	3
Ni qui sût rappeler ma liberté bannie.	4
Dès longtemps je connais sa rigueur infinie,	5
Mais pensant aux beautés pour qui je dois périr,	6
Je bénis mon martyre, et content de mourir,	7
Je n'ose murmure contre sa tyrannie.	8
Quelques fois ma raison, par de faibles discours,	9
M'incite à la révolte, et me promet secours,	10
Mais lorsqu'à mon besoin je me veux servir d'elle;	11

Après beaucoup de peine, et d'efforts impuissants,	12
Elle dit qu'Uranie est seule aimable et belle,	13
Et m'y rengage plus que ne font tous mes sens.	14

[解説] この詩に関しては Lagard et Michard の記述を借りよう。「この詩に関する論争はヴォワチュールの死後、すなわち1648年から1650年にかけて起きた。この作品に対して、ヴォワチュールの衣鉢を継ごうとしていたバンスラード (Benserade) の作品 *Job* が対抗させられた。二つの陣営が形成された、ロングヴィル公爵夫人 (Anne-Geneviève de Longueville) に率いられた Uranistes と、夫人の弟コンチ大公 (Armand de Bourbon, prince de Conti) の下に集まった Jobelins である。最も有名な闘士はサラザン (Jean-François Sarasin)、スキュデリー兄弟 (Georges et Madeleine de Scudéry)、シャプラン (Jean Chapelain)、デマレ・ド・サン＝ソルラン (Jean Desmarets de Saint-Sorlin) それにゲ・ド・バルザック (Jean-Louis Guez de Balzac) であった。バルザックはこの論争のために20枚もの論文を物した。コルネイユ (Pierre Corneille) は思慮深く引っ込んで、ノルマンディ風に旗幟を鮮明にしなかった。』⁽⁶⁾

[訳] 私の命はユラニーへの愛の内に終えねばならぬ。不在も時も私を癒せない。もはや私を救い、私の自由を取り戻しうるものは見えない。(1-4)

ずっと以前から、かの方の限りのない厳しさを知ってはいても、身を滅ぼすに値する美しさを思えば、私は私の殉難を称え、死を喜び、かの方の専制に恨みは述べはしない。(5-8)

時に、私の理性が、その弱々しい弁論で私を反抗に誘い、私の救済を約束する。ところが私が必要に際し、理性を使おうとする時、多大な苦しみと、無益な労苦の後、私の理性は言う、ユラニーは独り愛らしく、美しいと。そして私の感性がなし得ないほどに私をかの方に結びつける。(9-14)

op.19

Belles fleurs, dont je vois ces jardins embellis,	1
Chastes Nymphes, l'Amour et le soin de l'Aurore,	2
Innocentes beautés que le Soleil adore,	3

6) Lagard et Michard, *XVII^e siècle, les grands auteurs français de programme*, p.63.

Dont l'éclat rend la Terre et les Cieux embellis.	4
Allez rendre l'hommage au beau teint de Philis,	5
Nommez-la votre Reine, et confessez encore,	6
Qu'elle est plus éclatante et plus belle que Flore,	7
Lorsqu'elle a plus d'œillets, de roses, et de lis.	8
Quittez donc sans regret ces lieux et vos racines,	9
Pour voir une beauté dont les grâces divines,	10
Blessent les cœurs des Dieux d'inévitables coups;	11
Et ne vous fassiez point si vous mourez pour elle,	12
Aussi bien la cruelle	13
Fera bientôt mourir tout le monde après vous.	14

[訳] この庭を飾る美しき花々よ、貞淑なる妖精よ、アモールよそしてオーロールの心づかいよ、そのきらめきで地上を天上を美しく飾る太陽が崇める無垢なる美よ。(1-4)

さあフィリスの美しい肌に称賛を捧げなさい、かの方をお前たちの女王と名付けよ、そして告白しなさい、かの方は、たくさんのカーネーション、薔薇、百合を手にするとき、フロールより輝かしく、美しいと。(5-8)

したがって未練なく、その場を、お前たちの根を離れなさい。その神々しい優美さが神々の心を避けがたい衝撃で傷つけてしまうそんな美を見るために。そしてかの方のために死ぬことを恨みに思わぬように、まもなくこの残酷な美は、お前たちの後にあらゆるものを死に赴かせるのだから。(9-14)

op.20

L'autre jour au palais des Cieux,	1
En une fête solennelle,	2
Où la triomphante Cybèle,	3
Traitait ensemble tous les Dieux.	4
Après maints discours sérieux,	5
Sur la régence universelle,	6
Tout en rond la troupe immortelle,	7
Prit un Nectar délicieux.	8
Lors on proposa par la table,	9
Laquelle était plus souhaitable	10

Ou d'Angélique, ou Cypris;	11
Les Dieux furent pour la Pucelle,	12
Et Vénus la mère des Ris,	13
N'eut que Mome, et Vulcain pour elle.	14

[訳] 過日、天上の宮殿で、勝ち誇ったキュベレ（ギリシャ神話の大地母神）がどんな神々も等しくもてなしていた謹厳なる祝宴で。宇宙の治世に関しての真面目な議論の後に、これら不滅のものたちは、輪になり、美味なるネクターをとっていた。そのとき誰かが提案する、どっちが好ましいかしらん、アンジェリック（アンジェリック・ポーレ）かキュプリス（ヴィーナスの別称）か。神々は処女を推す、されど「笑い」の母たるヴィーナスはモーム（皮肉の擬人化）かヴェルカン（ローマの火の神）しか味方を持たないときた。

op.21

Des portes du matin l'amante de Céphale,	1
Ses roses épanchait dans le milieu des airs,	2
Et jetait sur les Cieux nouvellement ouverts,	3
Ces traits d'or, et d'azur qu'en naissant elle étale.	4
Quand la Nymphé divine, à mon repos fatale,	5
Apparut, et brilla de tant d'attraits divers,	6
Qu'il semblait qu'elle seule éclairait l'Univers,	7
Et remplissait de feux la rive orientale.	8
Le Soleil se hâtant pour la gloire des Cieux,	9
Vint opposer sa flamme à l'éclat de ses yeux,	10
Et prit tous les rayons dont l'Olympe se dore;	11
L'onde, la terre et l'air s'allumaient à l'entour:	12
Mais auprès de Philis on le prit pour l'Aurore,	13
Et l'on crut que Philis était l'Astre du jour.	14

[解説] 有名な *Belle matineuse* の sonnet。多分1635年のヴォワチュールの書簡に加えられたものであろう。この詩に関しても Lagard et Michard の記述を借りよう。「このテーマはすでにデュ・ベレ（Joachim Du Bellay）にも感興を与えている。1645年頃ヴォワチュールはランブイエ邸でこの詩を朗唱した。まもなくマルヴィル（Claude de Malleville）は同様の感興の3つの詩を対抗さ

せた。論争はしばらくの間社交界を占領した。社交界はマルヴィルはの詩の方を好んだように思える。』⁷⁾

〔訳〕 朝の扉を明けて、セファール（ケファロス、彼を愛したオーロールに拉致された）の恋人が大気の中に薔薇をばらまき、姿を現しながら広げるその金色と紺碧の色を、新たに開いた空に向けて投げ掛ける。(1-4)

神々しいニンフが私の宿命的な休息の場に現われ、幾多の魅力を輝かす時、その乙女のみ宇宙を輝かせ、東方の岸辺を火で満たすと思われた。(5-8)

天上の栄光のために、太陽は急ぎかの乙女の目の輝きに自らの火を競わせようと訪れ、オリンピアの山を黄金色にかがやかすあらゆる光線を身にまとう。(9-11)

海が、大地が、大気はその周囲に輝く、されどフィリスの傍らにあっては太陽もオーロール（朝焼け）かとまごうばかり、フィリスこそ昼間の太陽かと思われた。

op.22

Quelle docte Circé quelle nouvelle Armide,	1
Fait paraître à nos yeux ces miracles divers	2
Et depuis quand les corps par la vague des airs	3
Savent-ils s'élever d'un mouvement rapide?	4
Où l'on voyait l'azur de la campagne humide,	5
Naissent des fleurs sans ombre, et des ombrages verts,	6
Des globes étoilés les palais sont ouverts,	7
Et les gouffres profonds de l'empire liquide.	8
Dedans un même temps nous voyons mille lieux,	9
Des ports, des ponts, des tours, des jardins spacieux,	10
Et dans un même lieu, cent scènes différentes.	11
Quels honneurs te sont dus, grand et divin Prélat	12
Qui fais que désormais tant de faces changeantes	13
Sont dessus le théâtre, et non pas dans l'Etat.	14

〔解説〕 「マザラン枢機卿猥下に、機械仕掛けのスペクタクルに関して」

7) Lagard et Michard, *XVII^e siècle, les grands auteurs français de programme*, p.62.

という標題を持つ。Ubiciniはこの作品を1645年にマザラン (Mazarin) がイタリアから呼び寄せ、Petit-Bourbonで上演させたオペラ *La Festa teatrale della finta pazza* か1647年に同じくイタリア語で上演されたオペラ *Orphée et Eurydice* と結び付けて考えている。AdamはTallemantへの注で、1647年にマザランの発案で上演されたLuigi Rossiの*Orfeo*との関連を推す⁸⁾。

[訳] どんなに知恵深いキルケ(『オデュッセイア』やアルゴノートの伝説に登場する魔女)であろうと、どんなに新し者のアルミード(タッソの『エルサレム解放』のヒロイン、魔女であり、その庭は悦楽の庭の代名詞)であろうと、我々の目にこれらの様ざまの奇跡を見せられましょう。それにいずれの時から体は空気の波によってあんなに素早い動きで高く昇れたのでしょうか。(1-4)

しっとりした田舎の青空と見えた所に、数え切れぬ花々や緑の影が生まれ、きらきらの天体の宮殿や、液体の帝国の深い淵が口を開くのです。(5-8)

時を同じくして私達は千の場所、港や橋や塔や広々とした庭を見、所を同じくして百の場面を見るのです。(9-11)

今後変幻自在の多くの顔を、国家の中にはなく舞台上の上にあらしめた、偉大で神々しい聖職者よ、いずれの名誉があなたに帰すべきなのでしょう。(12-14)

テーマ

さてこれらの6編はop.22を除いて、共通のテーマを持っていると言って良いだろう。すなわち女性賛美の歌である。op.22は上演された演劇にからめた権力者への頌歌なので、いささか例外的ではあるが、やはりギリシア、ローマ神話的世界を題材にしている。したがっていずれも、ギリシア、ローマの神話世界を創造の手がかりに使っているという共通の性格を持っている。そこでこの二つのテーマ、神話世界への言及と女性美の賛美、についてヴォワチュールの世界を見ていこう。

ギリシア、ローマ神話

ヴォワチュールの詩的イメージで最も多く使われるのは「月並みに」ギリシア、ローマの神話的世界である。ギリシア、ローマ神話への言及はヴォワチュールの書簡にも多いのだが、sonnetに登場する比率は一段と高い。6編すべてに神話的なテーマがちりばめられる。

8) Tallemant des Réaux, *Historiettes*, t.2., p.296.

まず太陽、光のイメージとして Aurore や Apollon が形容として使われる。op.17、19、21に登場する Aurore は太陽、夜明けの形容であって詩的な形容というよりも、字義通りの使用例というべきかもしれない。ヴォワチュールの書簡や詩の中では具体的な若い女性の形容として用いられる。この形容が最も多く使われたのはブルボン嬢(ロングヴィル公爵夫人)。他に、若い頃の大コンデの思われ人であったヴィジャン嬢 (Marthe de Vigean) を形容した例もある⁹⁾。なお op.21、*Belle matineuse* の第1行の Céphale は Aurore の恋人なので、この表現は Aurore 自体の敷衍である。Aurore を歌う、あるいは援用する作品はこれら3編の sonnet 以外に10編ほどがある。

Apollon の名そのものは6編の sonnet には登場しないが、Apollon のテーマは Aurore とは隣接している。op.17に見るような馬車を駆って天を巡る姿は、文学、芸術で好んで取り上げられるテーマである。したがって soleil という言葉も時に、ギリシア神話的イメージを伴って使われる。時に *Astre du jour* と言い換えられることもある。ギリシア神話的イメージが明確に意識されているときには、op.17や21に見られるように、Apollon と Aurore は男性と女性の姿で認識され、Aurore に敗れる Apollon といったイメージが使われる。ところが soleil と名付けられるときには太陽は男性的な属性を失って、「輝くもの」という属性だけがイメージとして使用される。したがって女性への形容に使われうる。たとえば op.34, v.69の *Vigean est un Soleil naissant*¹⁰⁾。

「天」、「空」は、op.17, v.7に見えるように、ギリシア神話の神々の宿りとして、複数 *cieux* で表現される事が多い。単数 *ciel* が使われる場合も少なくはないが、この場合は具体的なイメージは伴わず、大地や海に対立される項として置かれる。空自体は、神々の活躍する舞台装置としての役割しか負わされておらず、擬人化された表現はない。しかし空が複数 *cieux* で表現される場合には、op.20に見られるように突然人間臭い神々であふれ始める。

op.17, v.9の *Thétis* はギリシア神話で海の化身である。もっとも船旅を少なからず経験したことのあるヴォワチュールだが、海(または河)は決して特権的な位置を占めてはいない。海の形容に神話的なイメージは多くない。*Thétis* の例はこの行のみだし、これ以外の神話的な海の象徴としては *Neptune* が1例見られるくらいである。もっとも太陽、空、大地などとの対で海は語られるこ

9) いずれも拙論「ヴォワチュールによるロングヴィル公爵夫人と大コンデ」参照。

10) op.34, v.69、この *Vigean* は先に見た *Marthe de Vigean*

とはある。ただしその場合は神話的な擬人的イメージを伴わず、mer (8例)、flots (6例) や onde (16例) あるいは op.22の empire liquide で名指しされる。この数は ciel, cieux がそれぞれ50例を超えて頻出する語なのに比べれば少ない。

大地の神話的テーマは op.20の Cybèle があるが、1例のみで他にも大地の擬人的表現は見あたらない。大地も海と同じく天、空と対置された形でのみ語られ、イメージを展開させるテーマとは考えられなかったようである。「大地 (terre)」という語を探すと全体で44例。内15例は ciel (cieux) や air、onde といった語と同時に使われている。単独で使われる場合は「大地」の意味より「地上」の意味の場合が多い。

女性の名

ギリシア、ローマ神話にゆかりの名は、天空や海原などといった舞台装置を表すためだけでなく、具体的な人物、ことに女性の形容にも使われる。

op.17、19、21には Nymphe の名が使われる。ただギリシア神話における Nymphe は自然の様々な姿の擬人化であって、「若い娘」という属性が共通するだけで実際は様々なものを形容しうる。つまりイメージは一義的ではない。そのためかヴォワチュールの作品全体の中での頻度は低い。(他に4例のみ)

若い娘を形容するのであれば、Aurore の例に見て取れるように、もっと具体的な名前が使われる。たとえば上に掲げた sonnet の中に見られる Uranie、Angélique、Philis などである。

Uranie (op.18、116) は天文学を司るミューズである。また Aphrodite の別称でもある。ランブイエ邸のサロンの中では具体的にはランブイエ夫人 (Catherine de Vivonne de Rambouillet) を指すと考えられるので、サロンの面々には若い娘とは考えられなかったかもしれない。

Angélique (op.20、27、28、31、35、50、89、116) は「天使」と結びつけては理解されていなかったに違いない。op.31の124の「天使のようなアンジェリック (Et l'angélique Angélique)」という詩句からも想像できるように、Angélique は実際の名前 Angélique Paulet を織り込んでいる。したがって同時代の読者にとっては具体的な人物が思い出され、詩的感興はさして喚起しなかつただろう。

op.20で Angélique に対抗する Cypris (Vénus) は、確かに美の形容に使われるのだが、いささか趣が違って、美しさを称えられるだけではない。つまり少なくともこの詩では美女として称揚されずに、アンジェリックに敗れる側に置かれている。他にも op.59, v.12に見られるように、引き合いに出された挙げ

句、否定的な評価を下される例がある⁽¹¹⁾。さらに美の女神ヴィーナスとしてよりもアモール (Amour ou Cupidon) の母としての属性の方が強く意識されているたとえば、この作品の他に、op.47,v.6の *Vénus, d'Amour la gracieuse mère* など。なおギリシア神話で同一化される *Aphrodite* はなぜか全く登場しない。

Philis は (op.2、14、19、21、59、60、69) は美女の呼称で、この時代には詩的な名前として使われている。たとえば1638年にはジェルマン (Hubert Germain) が *La Métamorphose des yeux de Philis en astres* という作品を書いている。ヴォワチュールの中では op.14でマロル嬢 (Magdelaine-Claire de Lenoncourt de Marolles) を指す以外は特定の女性には同定しがたい。

Sonnet の中には登場しないが、これ以外にヴォワチュールの中には *Bélise* (*Bélize*) (op.1と23)、*Iris* (op.2、35、72)、*Diane* (op.6、15、31、34、111)、*Minerve* (op.8、35、84、116)、*Sylvie* (op.9、14、30、62、90)、*Oronte* (op.10)、*Cloris* (op.25、31、71、101、114) などがである。これらの内、*Minerve* はヴォワチュールの最初の愛人であったサント夫人 (Marguerite Vion de Saintot) を、*Oronte* と *Cloris* はリシュリュー (Richelieu) の姪であるコンバレ夫人 (Marie Magdelaine de Vignerot, dame de Combalet, duchesse d'Aiguillon) を指す。*Diane* は *Vénus* のように、特定の人物を指すよりも描写される人物の美しさを引き立たせるためのライバルとして使われている。ヴォワチュールが1630年頃ラヴァレット枢機卿 (Louis de Nogaret de La Valette) 宛の書簡の中で語っているように、ブルボン嬢が *Diane* に扮した事があるが⁽¹²⁾、この扮装がその後特別に取り上げられることはない。*Sylvie* はローマ神話の森の精 *Sylvain* から派生した名だが、森のイメージを膨らまして使われていないので、神話的喚起力は期待されていなかったのかもしれない。いずれにせよこれらの名前は、*Aurore* のように普通名詞としても通用しているものに比べればイメージを喚起する力は弱いかもしれないが。

色の名

Aurore は神話的人物であると同時に、天文現象としても意識されるので、その色合いが感じられる。その色合いは「金色」と「紺碧」である。いずれも表

11) op.59については拙論「ヴォワチュールの Rond 注解」参照。

12) 拙論「ヴォワチュールによる ロングヴィル公爵夫人と大コンテ」参照。

現として陳腐化が進んでいたのか、それほど使われることはない。これ以外に「金色」が9例と「紺碧」が5例。ことに azur は空を形容するくらいしか使いようがない。

概してヴォワチュールの詩は色彩感感には乏しい。引用している sonnet 6 編の内「金色」、「紺碧」以外の色は op.22の6の「緑」くらいである。そして「緑」という語の使用例は、全詩作品の中でこれのみである。他に色を探してみても、ほとんどの色が2度か3度という頻度である。「白」が5例、肌の形容としての「真紅 (vermeil)」が5例と目立つ程度である。こうしてみるとヴォワチュールは色彩を表現したいとは思わなかったらしい。例外的に比較的多く使われる色の名は「黒」で14例を数える。「黒」だけが多いという点は、ヴォワチュールの内部世界の暗さを予想させるが、実際の「黒」の使用例を見てみると、確かに「黒い森」(op.10, v.26)、「私の黒く乾いた舌」(op.90, v.17)、「黒い波」(op.96, v.70) など、「黒」を否定的に使う例もあるが、「黒い色の二つのアーチ (これは女性の眉の形容)」(op.7, v.38)、「ある美しい黄色と黒の靴に魅せられてしまって、その支配下に入った私、その靴を自分自身よりも愛していて今や私はある黒と青の靴に夢中なのです」(op.12, v.3-6)のように、必ずしも黒は否定的な色というわけではない。

花の名

Belle matineuse は「薔薇」を大気に投げかけるが、花の名の使用例は多くない。しかも少ない例の中で比較的多めに使われるのは「薔薇」のように、詩的に特権的な花のみである。さらにいえば、花そのものが詩の対象として歌われることは少なく、何かをたとえる比喩表現として使われる。

たとえば「薔薇」は13例。具体的な花が語られることもあるが、女性の唇や、肌の色の形容として使われる。

「薔薇」以外に多く使われるのは op.19に並んでいる「百合」が8例、「カーネーション」が6例で比較的多い。ただ「百合」はその白さから女性の肌の白さの形容に使われる。また「カーネーション」も唇の形容に使われることがある (op.35, v.20)。

他には Narcisse が2例あるが、大文字で書かれていることから、具体的な花よりもギリシア神話の人物をほうふつとさせる。それ以外に花の名は乏しく、ロンサールに歌われたサンザシ (aubépine) のような、ギリシア神話に登場しそうにない花が特権的な地位を占めるということはない。

そもそも植物の名前は概して少ない。まれな例として「柏 (chêne)」(1例)、「月桂樹 (laurier)」(7例)、「ミルテ (myrte)」(1例)「橄欖 (olive)⁽¹³⁾」(3例)や、「棕櫚 (palme)」(2例)、が使われるが、いずれも古代世界で栄光や勝利を象徴する植物であって、現実の植物としてではなく、詩語として使われていることが明白である。従ってこれらも女性の形容には使われない。それにしても olive や palme はヴォワチュールが現実に見たことがあるはずの樹木なのだが⁽¹⁴⁾、すでに詩的に特権化されていたものを除いて自然を歌おうとは思いつかなかっただろう。

肉体の美

さて6編の sonnet は op.22を除いて女性の美を語るのだが、具体的に女性のどのような美しさを語るのか。

「髪の毛 (cheveux, chevelure)」はあまり言挙げされない、3例しかなく、それぞれの色も金髪、黒髪、言及無し、と特に偏愛する色もなかったようである。blond や brun という髪にかかる形容を入れても、髪への言及は10例を越えず、髪の毛に対しては特別に興味がなかったと見える。

「目 (Œuil, yeux)」は特権的な地位を占めていて多用され、131例。複数で使われる事が多い(114例)。op.17や21に見えるようにほとんどすべて「あなた(彼女)の目」を語る。その目は「輝き」「私の心をうつ」。しかし「目」は多く歌われる割にはその形容は一律で変化に乏しい。それらは大概いつも、「美しく」、「輝いて」、「我々をとらえ」、「私の心を打つ」。

まれに「私の目」を語るときには、「(あなたを)美しいと見た私の目」といった表現として使われる。

「額 (front)」の使用例は詩語の割に少なく4例のみ。ただこの場合も形容は月並みに「白く」「高い」。

「鼻 (nez)」、「耳 (oreilles)」はほとんど登場しない。「鼻」は滑稽なので高貴なジャンルにはそぐわないのだろうが、滑稽な詩を多く書いたヴォワチュールには珍しく少なく1例のみ (op.64, v.3)。

「耳」は「(聞く)耳を持たなかつたり」(op.14, v.53)、「耳を開いたり」(op.93, v.9)と感覚器官として、「聴覚」の意に使われるだけで、耳自体の美しさを語ることはない。7例のみ。

13) 橄欖はオリーブとは別種の植物らしいが、あえてこの古典的な名称を借りる。

14) 拙論「ヴォワチュールのスペイン、アフリカ旅行」参照。

「耳」が聴覚の隠喩として使われているのに対して、「口 (bouche)」は「ことば」の隠喩としてよりも、文字どおりの肉体として賛美の対象にされる。23例。その場合「薔薇」の項で見たように「口」は「美しく」「薔薇やカーネーションのように紅い」。ただし「口」は語られても「唇 (lèvres)」は語られず1例のみ (op.5, v.25)。

「顔」全体は visage と face を併せて28例。この中には op.22の例に見るように女性の顔でない例もあるが、大部分は「あなた (彼女) のかんばせ」。形容には大して面白味はない。

「歯 (dent)」はほとんど語られない。歯の美しさを語ることは皆無。歯は詩的な領域には入ってきていなかったのか、歯に「傷んだものがある」と Portrait du pitoyable Voiture で歌われたヴォワチュール¹⁵⁾だから、歯は語りたくない部分だったのか。5例のみ。ただし、少ない出現例も「歯ぎしりする」(op.84, v.11)、「dire entre ses dents (不明瞭に話す)」(op.99, v.125)、といったもので詩的ではない。

「顔色 (teint)」は時に白く、時に赤い。「薔薇」と「百合」で同時に形容されることさえある (15例)。

「手 (main)」、「腕 (bras)」は女性の美が宿るところだとは考えていなかったらしい。main は具体的なイメージとして使われるわけではなく、「手中に収める」といった風なむしろ抽象的な表現であって、手自体の美しさはほとんど語られない。手に口づける詩句は意外に少ない。op.92, v.1.のみ。「腕」はさらに少なく明らかに女性の腕を指すのは op.59, v.5のみ。それ以外の例はもっぱら力の象徴としての「(男性の) 腕」である。

「胸」はきわめて例外的。17世紀当時は卑語と見なされた poitrine が全く現れないのは当然としても、gorge が op.60, v.6で語られるだけであり、sein はこの意味では使われていない。

「脚 (pieds)」は、脚や靴へのフェティシズムを感じさせる op.12の中で言及される。他には op.16の中でもいささかエロチックなイメージとともに言及される程度である。ちなみに jambe は1例あるが女性の脚ではない。

エロチックというよりも滑稽と言うべきなのだが、「お尻 (cul)」は op.14にのみ出現する。Magne の解説によると、1630年頃、ランブイエ邸の遠出の馬車が転倒して投げ出されたマロル嬢のスカートがめくりあがるという事件があった。

15) Tallemant の Voiture の項の注に全文有り。Tallemant des Réaux, *Historiettes*, t.1., p.1120.

この人物を快く思っていないランブイエ夫人がヴォワチュールにこの詩を書くように勧めたという¹⁶⁾。

「触る (touche)」は14例。もっとも私があなたに触れるのではなく、「あなた(の目)が、私の心や魂に触れる」。「私が触れる」のは、やはりエロチックなイメージを秘めている op.58の例。この場合、「あなたのご存じの所に触れさせてください」、と詩人は馴れ馴れしい。

観念的な美

どうやらヴォワチュールは観念の詩人だったらしい。具体的なものについてはほとんど書かず、描かれる女性の美は観念的で抽象的である。独創性や具象性には頼らず、手っ取り早く抽象的な語で女性を総括する。

すなわち称えるべきは女性の「美」(op.18、19)であり、「優美」(op.19)である。beautéは全体で74例、ただし形容詞の例が他に227例ある。grâceは45例、この中には、大文字で始まって「優美神」を指す例や、「恩寵」の意で使われている例も若干含まれる。

これ以外に上に掲げた sonnet には含まれないが、女性の美を表現する抽象的な言葉として、*attraits*、*appas*、*charmes* などがある。たとえば *charmes* の使用例は26。この語は複数で使われると具体的な女性の魅力を表現する。つまり肉体的なイメージが背後に覗く語である。しかし、やはり具象性は豊かではない。同じような語を挙げてみると、*attraits* が24例。この語もことごとく複数で使用されており、女性の美しさを指すと考えられる。*appas* が30例、Le Robert によると特に女性の胸を指す。

精神性

では、女性の精神性はどう語られるのだろうか。

「魂 (âme)」は良く語られ98例。cœur はさらに多く101例。esprit は55例。ただしこれらの語に関してはいささか注意が必要である。先の *beauté*、*grâce*、*charme* などが明白に客体としての女性のそれを指していたのに対して、魂、心、精神なる語はその半ば以上に「私の」という所有形容詞を伴う。つまり、これらの語が使われる詩句の多くにおいては、「あなたの美しさにとらえられてしまった私の魂」が語られるのであって、「あなたの魂」は詩の対象になることは少ない。

16) Magne, p.39.

これらより出現数は15例と少ないが「理性 (raison)」になると、この語は女性に対しては全く使われない。語られるのは詩人の理性のみである。もっとも op.18に見られるように、詩人の「理性」は常には女性の美を前にしては弱く、囚われの身となる。

終わりに

以上ヴォワチュールの作品世界をいささか乱暴に、目に着いた語を手がかりに、斜めに眺めてきたわけだがそれでもいくばくかの着目すべき点が見つかったような気がする。

ヴォワチュールはギリシア、ローマ神話世界のイメージを駆使して詩作をおこなっている。ただし、そのテーマは限定されている。すなわち「天」や「太陽」や「光」を形容する表現としての神話世界の人物（神）は頻出するが、それ以外の神々には滅多にお呼びがかからない。

さらにギリシア、ローマの女神たちは、ヴォワチュールの同時代の現実の女性の形容に駆り出される。今となっては明確に同定しがたい人物もあるのだが、『アストレ』や『グラン・シリユス』の読者たちには容易に同定できたに違いない。とすれば、これらの神話的人物たちも、本来神話世界で持っていた属性を失い、具体的な人物の、単なる別称として通用していたに違いない。詩的喚起力はまさに「月並み」に落ちていたであろう。

また、ヴォワチュールが語る女性の美はまれに大胆な例を除けば、概して観念的でおとなしい。表現は抽象的で、具体的な女性の姿はほとんど語られない。女性の「魅力」や「優美さ」、「美しさ」は倦きず語られるのに、実際にどの部分の美しさが語られるかという、せいぜい美しさを歌われるのは「目」だけで、「百合のような肌合い」にも「薔薇のような口」にもまれにしか出会うことはない。といって女性の精神性の美しさは語っても仕方がないのか、「魂」や「心」は主に詩人の側にのみあるようだ。ましてや「理性」となると女性には全く付与されない。もっとも、詩人の「理性」として常に女性の美しさに翻弄されて全く機能しないのではあるが。(1994年9月20日)

書誌

書籍

VOITURE, Vincent, *Poésies*, édition critique publiée par Henri Lafay, 2 vols.,

Paris, Librairie Marcel Didier, 1971.

VOITURE, Vincent, *Œuvres de Voiture*, lettres et poésies, nouvelle édition revue en partie sur le manuscrit de Conrart, corrigée et augmentée de lettres et pièces inédites, avec le Commentaire de Tallemant des Réaux, des éclaircissements et des notes par M. A. Ubicini, 2vols., Genève (Paris), Slatkine, 1967 (1855).

LAGARDE, André et MICHARD, Laurent, *XVII^e siècle, les grands auteurs français de programme*, Paris, Bordas. 1982, ISBN. 2-04-000030-5.

GRIMAL, Pierre, *Dictionnaire de la mythologie grecque et romaine*, Paris, Presses Universitaires de France, 1991.

MAGNE, Emile, *Voiture et l'Hôtel de Rambouillet, les années de gloire (1635-1648)*, Paris, Emile-Paul Frères, 1930 (nouvelle édition).

MORIER, Henri, *Dictionnaire de poésie et de rhétorique*, Paris, Presses Universitaires de France, 1988.

TALLEMANT DES REAUX, Gédéon, *Historiettes*, tome 1. Paris, Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade), 1990. ISBN. 2-07-010547-4.

TALLEMANT DES REAUX, Gédéon, *Historiettes*, tome 2. Paris, Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade), 1980.

田島俊郎 「ヴォワチュールのスペイン、アフリカ旅行」、『徳島大学教養部紀要(外国語・外国文学)』第1巻、1990年

田島俊郎 「ヴォワチュールの Rond 注解」、『徳島大学教養部紀要(外国語・外国文学)』第4巻、1993年

田島俊郎 「ヴォワチュールによるロングヴィル公爵夫人と大コンデ」、『言語文化研究、徳島大学総合科学部』第1巻、1994年

ソフトウェア

Omnipage[®] professional, Macintosh[®] Version 2.1, Caere Corporation.

MS-Word english version 4.0, Microsoft[®], 1989.

Hugo, version 7.1b, Logidisque, 1993.

SANS-FAUTE, édition ACI, 1989.

FileMaker Pro, Claris[®] corporation, 1989.